

# 研究部会／活動報告

## (宗教部会)

二〇〇二年十月～二〇〇三年九月

◇二〇〇二年十月一日 研究例会

\*「山口県における浄土真宗と部落差別」

レポート 山口県熊毛郡 浄泉寺住職 吉田龍生さん  
 ・山口県における「部落寺院」の実態を「山口教区内部落差別の歴史と実態調査委員会」委員でまとめられた「山口県における部落寺院の歴史と同朋運動の展開」を元にして発表がなされた。

特に江戸の初期における四カ寺にみる部落寺院の成立とそれぞれの分担地域、歴史などが明らかにされた。この度の調査研究によって、山口県内の部落寺院と被差別部落との歴史が解明されている。

◇二〇〇三年二月四日 研究例会

\*「ハンセン病と浄土真宗：過去・現在　そして未来」

レポート 広島市安佐北区安佐町 教雲寺 藤井聡之さん

・ハンセン病に対して「業病」という言い方で代表される仏教・浄土真宗が与えてきたもの、また一九八七年に西本願寺に問題提起された「S布教徒ハンセン病差別法話問題」に象徴される問題、さらには本願寺新報・二〇〇二年二月二〇日号に、「瓦懇志を集めるのに、元ハンセン病患者さんよりの懇志があつたことを利用した記事の問題点などについて報告がなされた。

◇二〇〇三年五月一四日 研究例会

\*「浄土真宗東西両派・部落解放交流会」

・部落解放研究所宗教部会のメンバー（浄土真宗本願寺派僧侶・門徒、広島県連同盟員など）一四人と、真宗大谷派同和関係寺院協議会（同関協）の会員一人が、教団内の部落問題への取り組み、とりわけ「部落寺院」と門徒の現状について意見交換を行った。特に大谷派の同関協（現在一七五カ寺）の側からは、各寺院の置かれている状況が報告、それに対して宗教部会のメンバーからは、同朋三者懇話会を中心とした取り組みなどが報告された。

◇二〇〇三年六月二八日

\*「第二回 小森龍邦さんの対談を聞く会」

・福山市の備後会館を会場に、「小森龍邦さんの対談を聞く会」（宗教部会 協賛）を開催した。テーマは「国家を問う―浄土の回復―わたし自身の人間回復」。このテーマの下、小森龍邦さんと対談者、瀬戸内ハンセン病訴訟原告・金泰九（キム・テグ）さん、浄土真宗大谷派教学研究研究所所長・玉光順正さんの三者で対談が行われた。国家を問わせない社会状況がますます作られつつある中で、国家を問うことによって自身の人間性回復が初めてはか

れるということ、ハンセン病国賠訴訟を通じて語られると同時に、国策に準じて、隔離を前提とした信仰を法話等によって伝えてきた宗教教団の問題性が指摘された。そして、その「国に勝つには」というところで対談が進められた。

◇二〇〇三年八月一日

\*「札幌の本願寺派寺院 差別落書き」

→ 現地を訪ねての報告

レポート 双三郡三和町 光永寺住職 毛利慶典さん  
 ・二〇〇三年四月・五月にかけておこった賤称語を用いた差別落書き、差別落書きについて、七月末現地調査を行い、被害者の聞き取りを行った毛利慶典さんが報告した。北海道では同一人物を対象に一九九四年から差別落書き・差別落書きが連続しており、その問題がまったく解決していないことが浮き彫りになった。

## （歴史部会）

構造改革の名目のもとに政治の反動化がますます進むとともに、広島県では教育行政の反動化がきわだつてい

ます。是正指導の名のもとに、教育の場面では子どもを切り捨てる方向で学校の非合理的管理・運営が強化され、不登校・中途退学の増加に拍車をかけています。法失効二年目を経過している現在ですが、早くも部落出身の子どもの高校・大学進学率に大きな影響が現れています。保護者・地域の団結と子どもへの取り組み、保護者として学校への取り組みが重要となっています。

法失効後の、自主的・自発的解放への取り組みを大切に続けていく必要があります。今年には広島県水平社創立八〇周年の年でした。八〇年前に融和主義を打破して官憲による厳しい弾圧の中を、自主的運動を起こした水平社の精神に立ち返るような、歴史の掘り起こしに取り組んで行き、現在の状況を止揚していきたいと考えます。引き続き、各地の歴史研究の成果を収集し、一冊の目録に収める作業と、各地に埋もれる自主的・自発的運動の状況を伝える研究を継続していきたいと思えます。

### (教育部会)

本年度教育部会では、前年度から掲げている課題、すなわち「部落の児童生徒にかかわる事実の把握」を開始した。本年度第一回目は、五月三一日に教育現場におけ

る部落児童生徒の差別と学力の実態について、五日市高校の伊達先生、崇徳高校の弘中先生、元高校教師の北野先生にお越しいただき、さまざまな角度からお話をいただいた。

第二回目は、九月一日、福島地区西隣保館において久保田真功氏（広島大学大学院）に「同和地区児童・生徒の低学力要因の検討―家庭の生活実態と自尊感情に着目して―」と題した講演をしていただいた。久保田氏は広島大学大学院時代から原田彰先生（元広島大学大学院教育学研究科教授、現呉大学教授）のもとで学力と部落児童・生徒の関連性について精力的に分析・検討を続けてきた気鋭の若手研究者であり、当部会長村澤の研究仲間でもある。

今回このような講演を企画したのは、つぎの二点の理由による。第一点は、昨年尾道で開催された教育部会の会合において、呉地区の先生から、学力と自尊感情の関連について調べていることを伺ったことが一つのきっかけとなっている。村澤の知る限り、部落問題への切り込み口として自尊感情へ注目したものは、過去大阪大学が研究にとりこんでおり、広島大学教育社会学研究室でもそれを参考に行政調査の中に盛り込み、久保田氏が中心となって分析を進めてきた。実はそれら成果については

微妙に異なっており、今後さらなる検証を必要としている。今回の講演をきっかけとして、現場での調査の取り組みとの照らし合わせによる検証が可能ではないか、と考えたわけである。

第二点は、村澤をはじめ広島大学でこれまで行政と部落の調査を進めてきたものは、部落問題に取り組んでいながら、部落問題に取り組んでいる別の人々や部落の人々当人との交流や接点が無かった。村澤を始め今回の講演者の久保田氏も、データという無機質な情報を通じてしか部落をかいま見ることができなかった。そうした経験不足の我々に現場体験が必要であることはいうまでもない。この講演をきっかけに講演者自身や村澤にとって、そして部落問題にかかわる人々にとって、交流の輪が広がれば、と考えたからである。いずれにせよ、部落児童・生徒の抱える諸問題を、「自尊心感情」というキーワードでどこまで切り込むことができるのかについて、研究者と現場との意見交換を通じて浮き彫りにできるのではないかと考えた。

第三回以降は、企画段階ではあるが、他地域の部落問題の事例についての紹介等を考えている。さらに、まだ個人的な思案の段階ではあるが、将来的には特定の被差別部落を対象とした実態調査を行いたいと考えている。

最近では尾道市で人権問題に関する意識調査結果が公表されたが、こうした意識調査と同時に重要なのは、部落の人々がどのような人生を歩んでいるか、どのような環境におかれているかといった「実態」の客観的把握である。部落差別問題に対する関心をより喚起するためにも、本格的総合的な調査が必要とされ、そこで得られた動かぬ事実を提示することこそ、問題解消への推進力となるであろう。皆様のご理解とご協力をお願いしたい次第である。

### (国際部会)

国際部会は、これまで、広島の近現代の都市下層と民族(エスニシティ)の研究ということで研究会を重ねてきた。その成果の一部は本号の水越・青木論文にみただけだろう。しかし、全体の研究会活動としては、この一年はじつしつ足踏みの状態で、ようやく、所員有志による小研究会が月一度のペースで進められてきただけである。これは、忙しいという事情もあるとはいえ、まずは早急に国際部会としての研究体制の立て直しが必要とされている。現在、広島近代にみる軍都と民族問題という主題で、研究会を再開する日程調整等を進めている。

他方、研究の啓発を目的とする集會を、三月二十九日、花岡一江さんを講師に迎えて開催した。主題は、韓国の軍隊慰安婦・戦争被害者による日本政府告発の闘いに学ぶということ、講師の熱弁に続いて、戦争・ジェンダー・韓国人／日本人などをめぐるイシューについて議論が沸騰した。今年度も、このような催しをいくつか考えている。グローバリゼーションと民族問題、ポストコロナリズムと民族問題などをめぐる、現代の戦争と平和の本質を説き起こす、そのような現代の思想的課題を射程に入れた、実践的な研究会をもちたいと考えている。より多くの会員に呼びかけるかたちで、ぜひ実現したい。

